

日蓮大聖人御書全集

やさぶらうどのごへんじ

弥三郎殿御返事

新版
2082
S
2085

弥三郎殿御返事

やさぶらうどのごへんじ

建治 3 年 ('77) 8 月 4 日 56 歳 弥三郎

これは無智の俗にて候えども、承り候いしに貴く
思い進らせ候いしは、法華の第一の巻に「今この三界は」

とかや申す文にて候なり。この文の意は、今この日本国

は釈迦仏の御領なり。天照太神・八幡大菩薩・神武天皇等
の一切の神・国主ならびに万民までも釈迦仏の御所領の内
なる上、この仏は我ら衆生に三つの故御坐します大恩の

仏なり。一には国主なり、二には師匠なり、三には親父な
ほとけ いち こくしゅ に しそう さん

り。この三徳を備え給うことは、十方の仏の中にただ
釈迦仏ばかりなり。

されば、今の日本国の一^{いま}切衆生は、たとい釈迦仏に
ねんごろに仕うること、當時の阿弥陀仏のごとくすとも、
また他仏を並べて同じようにもてなし進らせば、大いなる
失なり。譬えば、我が主の、しかも智者にて御坐しまさん
を、他国の王に思ひ替えて、日本国にすみながら漢土・高麗
の王を重んじて日本国の王におろそかならんをば、この國
の大王、いみじと申すものならんや。

いわんや、日本國の諸僧は、一人もなく釈迦如來の御弟子として頭をそり衣を着たり。阿彌陀仏の弟子にはあらぬぞかし。しかるに、釈迦堂・法華堂、画像・木像、法華經一部も持ち候わぬ僧どもが、三德全く備わり給える釈迦仏をば閣いて、一徳もなき阿彌陀仏を、国ごぞりて郷・村・家ごとに人の数よりも多く立てならべ、阿彌陀仏の名号を一向に申して、一日に六万・八万などす。打ち見て候ところは、あら貴や貴やと見え候えども、法華經をもつて見進らせ候えば、中々、日々に十惡を造る悪人よりも過重

きは、善人なり。

あくにん

ほとけ

寄

そうちら

おもか

悪人は、いずれの仏にもよりまいらせ候わねば、思い替

へん

ぜんにん

な

ほけきょう

つ

まい

わる辺もなし。もしまだ善人とも成らば、法華経に付き進ら

あ

にほんこく

ひとびと

親

あみだぶつ

ぜんにん

することもや有りなん。日本国の人々は、いかにも阿弥陀仏

しゃかぶつ

ねんぶつ

ほけきょう

おも

ひとびと

こころ 寄

より釈迦仏、念佛よりも法華経を、重くしたしく心よせに

おもまい

かた

ほけきょう

おも

ひとびと

ぜんにん

思ひ進らせぬること難かるべし。されば、この人々は、善人

にあくにん

なか

いちえんぶだいだいいち

ひと

だいほうぼう もの

まき

に似て悪人なり。悪人の中には一閻浮提第一の大謗法の者、

だいせんだい

ひと

しゃかぶつ

ひと

ひと

大闡提の人なり。釈迦仏、この人をば、法華経の二の巻に

ひと

みょうじゅう

あびごく

い

さだ

たま

「その人は命終して、阿鼻獄に入らん」と定めさせ給え

り。

されば、今いまの日本国にほんこくの諸僧等は、提婆達多・瞿伽梨尊者だいばだつたに
も過くよぎたる大惡人だいあくにんなり。また在す家の人々は、これらを貴すみ
供養くようし給う故に、この國くに、眼前に無間地獄むけんじごくと變へんじて、諸人がんぜん、
現身に大飢渴げんしん・大疫病だいえきびょう、先代になき大苦せんだいを受うけくる上うえ、他國たこく、
より責めらるべし。これはひとえに梵天ぼんてん・帝釈たいしゃく・日月等にちがつとうの
御おんはからいなり。

かかることをば、日本国にほんこくにはただ日蓮にちれんいちん一人ばかり知しつて、
始めは云いうべきか云いうまじきかとうらおもいけれども、「さ

りとては、いかにすべき。一切衆生の父母たる上、仏の仰
せを背くべきか、我が身こそいかようにもならめ」と思つ
て云い出だせしかば、二十余年、所をおわれ、弟子等を殺
され、我が身も疵を蒙り、一度まで流され、結句は頸切ら
れんとす。これひとえに、日本國の一切衆生の大苦にあわ
んを、兼ねて知つて歎き候なり。

されば、心あらん人々は「我らがために」と思しめすべ
し。もし恩を知り心有る人々は、二つ当たらん杖には一つ
は替わるべきことぞかし。さこそ無からめ、還つて怨をな
か

しなんどせらるることは心得ず 候。また在家の人々の、能
くも聞きほどかずして、あるいは所を追い、あるいは弟子
等を怨まる心えぬさよ。たとい知らずとも、誤つて現の
親を敵ぞと思いたがえて、詈り、あるいは打ち殺したらん
は、いかに科を免るべき。

この人々は、我があらぎをば知らずして、日蓮があらぎ
のよう思えり。譬えば、物ねたみする女の眼を瞋らかし
てとわりをにらむれば、己が氣色のうとましきをば知らず
して、還つて、とわりの眼おそろしと云うがごとし。

こくしゅ おんたず ゆえ

これらのことは、ひとえに國主の御尋ねなき故なり。ま

おんたず

もう

くに

ひとびと

た、いかなれば御尋ねなきぞと申すに、この国の人々、あ

とがおお

いちじょう こんじょう

たこく

ごしよう

まり科多くして、一定、今生には他国に責められ、後生に

むけんじごく

お

あくごう さだ

ゆえ

きょうもん

は無間地獄に墮つべき惡業の定まりたるが故なりと経文

れきれき そうちら

しんまい

そうろう

おのおの

歴々と候いしかば、信じ進らせて候。このことは、各々、

もの

せ

脅

たとい我らがごとくなる云うにかいなき者どもを責めおど

ところ

お

たま

そういう

つい

ただ

そうちら

し、あるいは所を追わせ給い候とも、よも終には只は候

ごぼう

みこころ

てんしょうだいじん

しょうはちまん

わじ。この御房の御心をば、たとい天照太神・正八幡も、

したが

たま

そうちら

ぼんぶ

よも随えさせ給い候わじ。まして凡夫をや。されば、度々

たびたび

だいじ

臆

こころ

どうじょう

おわ

の大事にもおくする心なく、いよいよ強盛に御坐します

うけたまわ

そういう

筋

もう たも

と承り候と、かようのすじに申し給うべし。

さて、その法師物申さば、取り返して、「さて、申しつる

ひがごと

かえ

しゃかぶつ

おや

しゅ

ことは僻事か」と返して、「釈迦仏は親なり師なり主なりと

もう もん

ほけきょう

そうろう

と

あ

もう

申す文、法華経には候か」と問うて、「有り」と申さば、

あみだぶつ

ごぼう

おや

しゅ

し

もう

きょうもん

そうちろう

「さて、阿弥陀仏は御房の親・主・師と申す経文は候か

せ

な

い

あ

い

と責めて、「無し」と云わんずるか、また「有り」と云わん

きょうもんあ

もう

ごぼう

ちち

にん

づるか。もし「さる経文有り」と申さば、「御房の父は二人

せ

たま

な

か」と責め給え。また「無し」といわば、「さては、御房は

ごぼう

おや

す

たにん

せ

たま

親をば捨てて、いかに他人をもてなすぞ」と責め給え。そ

うえ

ほけきよう

たきよう

に

たま

の上、法華経は他經には似させ給わねばこそとて、

しじゅうよねん

とう

もん

ひ

そくおうあんらく

もん

掛

「四十余年」等の文を引かるべし。「即往安樂」の文にかか

らば、「さて、これにはまずつまり給えることは承伏か」

詰

たま

しょうぶく

せ

と責めて、「それも」とて、また申すべし。

かま

かま

しょりょう

お

さいし

かえり

かま

かま

しょりょう

お

さいし

かえり

ひと
たの

んであやぶむことなかれ。

おも
き

ことし

せけん

かがみ

ただひとえに思い切るべし。今年の世間を鏡とせよ。そ

ひと

いま

い

あ

こばくの人の死ぬるに、今まで生きて有りつるは、このこと

遭

うじがわ

わた

とこ

にあわんためなりけり。これこそ宇治川を渡せし所よ。これ
こそ勢多を渡せし所よ。名を揚ぐるか、名をくだすかなり。

じんしん

う がた

ほけきょう

しん がた

しゃか

人身は受け難く、法華経は信じ難しとは、これなり。「釈迦・
多宝・十方の仏、來集して我が身に入りかわり、我を助け

たほう

じっぽう ほとけ

らいじゅう わ

み い

替

われ たす

たす

給え」と觀念せさせ給うべし。

じとう

許

め

地頭のもとに召さるることあらば、まずはこの趣を能
く能く申さるべく候。恐々謹言。

よ もう

そういう きょうきょうきんげん

おもむき よ

建治三年丁丑八月四日

日蓮 花押

や さぶろうどのご へんじ

弥三郎殿御返事